

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380616

研究課題名(和文) 会計測定の思想史と論理に関する総合研究 最適な会計システムの探究

研究課題名(英文) The general study on history of thoughts and logic of accounting measurement theory

研究代表者

上野 清貴 (Uneo, Kiyotaka)

中央大学・商学部・教授

研究者番号：90140631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間中に、著書『会計測定の思想史と論理』を作成し、公表した。本書の目的は、これまで会計学説および会計基準において様々な会計測定が提唱されてきたが、これらの会計測定がどのような思想および系譜を有し、それらがどのような論理を有しているのかを解明することによって、会計測定の将来を展望することである。

本書は、研究の出発点を1930年代の米国で公表された会計原則・会計基準においている。その会計測定の論理の変遷は、まず取得原価会計が提唱され、現在原価、売却時価、現在価値会計などへ引き継がれ、近年の国際会計基準で適用領域を拡大しつつある公正価値会計にたどり着いている。

研究成果の概要(英文)：I published "The history of Thoughts and Logic of the Accounting Measurement Theory" during the reseach period. The purpose of the book is to give the future views of accounting measurement theory by clarifying the thoughts and history of the one which was proposed on accounting theory and standards in the various ways and various ages.

The book starts with the US accounting plincipils and standards published in 1930s. The logical changes on accounting measurement theory are followings. The historical cost accounting was proposed fiest, then current cost accounting, exit value accounting and present value accounting are proposed. Finally, the current cost accounting has not left. The exit value accounting and present value accounting converged to the fair value accounting which is now applied in the international accounting standards.

研究分野：会計学

キーワード：会計測定 会計の思想史 会計の論理 取得原価会計 現在原価会計 売却時価会計 現在価値会計
公正価値会計

1. 研究開始当初の背景

現在、会計において公正価値会計が主要な会計となりつつあるが、ここに至るには、会計思想の変遷に関する長い歴史があり、論理の変遷があった。しかし、当時は各会計システムの提唱の事実およびそれらの論拠は明らかであっても、各会計システムを系統的につなげる総合的研究はほとんどなかった。換言すれば、会計測定の思想史と論理に関する研究はほとんどなかった。これを総合的に研究しようとしたのが、本研究の動機である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで会計学説および会計基準において様々な会計測定が提唱されてきたが、これらの会計測定がどのような思想および系譜を有し、それらがどのような論理を有しているのかを解明することによって、会計測定の将来を展望することである。

これまで、会計および会計理論の歴史において様々な測定基準ないし評価基準が提唱されてきた。取得原価、現在原価、売却時価、現在価値、公正価値がそれである。また、各評価基準を一般物価指数で修正する修正原価等も提唱された。そして、これらがそれぞれ会計システムを構成してきた。

これらの測定基準は独自の論拠ないし論理を有しているが、それが現在まで残っているものといないものがある。その理由を解明するとともに、残っている会計測定に関して現在まで息づいている論理を解明することを、本研究は目的としている。そして、これによって、会計測定の将来が展望できるものと期待される。

3. 研究の方法

研究目的を達成する方法として、まず、会計測定を全体的に理解するために、会計測定の基礎理論を説明する。そこではまず、これ

まで提唱されてきた会計は測定要素としての測定単位と評価基準との組み合わせからなっていることを明らかにし、会計システムの諸類型を導き出す。次に、各会計の概要を説明し、それを提唱した会計基準設定主体ないし会計学者を示す。

これらによって基本的な会計測定が明らかとなり、各会計システムの思想および論拠が明らかとなるので、これらを基礎として、現在まで残っているものといないものを識別し、その理由を明らかにし、会計測定に関して現在まで息づいている論理を改名するという方法をとっている。

一般に、会計システムの測定要素には、測定単位と評価基準とがあり、これらを組み合わせることによって各会計システムが構成されることになる。

ここで、測定単位とは、資産を測定するための基準単位であり、それは1円または1ドルのような貨幣単位で表される。資産はこの貨幣単位の量とその資産の関係づけによって測定されることになる。この基準単位である貨幣単位は必ずしも1つではなく、本研究との関係で、大きく2つに分けることができる。それは名目貨幣単位および一般購買力単位である。

名目貨幣単位は、一般物価の変動等を考慮しない測定単位であり、その時々々の基準単位を修正しないものである。一般購買力単位は、一般物価の変動を考慮した測定単位であり、一般物価指数の変動に応じて基準単位を修正していくものである。

他方、評価基準とは、測定単位によって関係づけられる資産の基準となる測定値のことであり、測定単位たる基準単位を1とした場合の貨幣単位量のことである。この評価基準には、その資産を取引する仮定によって5つの種類があり、それらは取得原価、現在原価、売却時価、現在価値および公正価値である。

そして、各会計システムはこれらの測定単位と評価基準を組み合わせることによって導出されることになる。それが、取得原価会計、現在原価会計、売却時価会計、現在価値会計および公正価値会計である。

これらには様々な思想が内在しているが、それらの系譜のかなで、それらの思想および論拠および欠点を明らかにし、前述したように、現在まで残っている会計測定思想を識別し、その理由を明らかにし、会計測定に関して現在まで息づいている論理を改名するという方法を、本研究はとっている。

4. 研究成果

本研究の研究成果として、著書『会計測定の思想史と論理』（中央経済社）を作成し、公表した。研究期間中に、著書『会計測定の思想史と論理』を作成し、公表した。

本書の目的は、これまで会計学説および会計基準において様々な会計測定が提唱されてきたが、これらの会計測定がどのような思想および系譜を有し、それらがどのような論理を有しているのかを解明することによって、会計測定の将来を展望することである。

本書は、研究の出発点を 1930 年代の米国で公表された会計原則・会計基準においている。その会計測定の論理の変遷は、まず取得原価会計が提唱され、現在原価、売却時価、現在価値会計などへ引き継がれ、近年の国際会計基準で適用領域を拡大しつつある公正価値会計にたどり着いている。

本研究から得られた知見は、現在の会計測定思想は、公正価値会計におけるキャッシュ・インフロー思想を主体とし、取得原価会計における信頼性および客観性を加えた混合測定会計思想であるということである。これが会計思想の継承に基づいた現在会計の本質であるということができる。

本研究の成果により、将来の会計測定に関して理論的および実践的展望が期待される。

会計測定を理論的に展望しようとする場合、新しい会計思想としてのリアル・オプション会計と経済付加価値会計の論拠ないし論理が重要となる。

会計測定の実践的展望として、今後の会計測定において、評価基準として現在の混合測定評価基準を適用し、測定単位として企業収益力単位を適用することが実践的に有望な会計であるということが出来る。この評価基準は現行の制度会計における評価基準であるので、いま、この会計システムを「成果制度会計」とよぶならば、成果制度会計をこれからの会計実践において適用すべきであるということになるのである。

これらが本研究に基づいた今後の会計測定の展望である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

上野清貴「利益と実在性」『商学論纂』(中央大学)第 57 巻第 3・4 号、2016 年 3 月、325 - 356 頁。

上野清貴「会計と実在性」『商学論纂』(中央大学)第 57 巻第 1・2 号、2015 年 9 月、1 - 31 頁。

上野清貴「現代会計理論研究の方向性」『経理研究』(中央大学)第 58 号、2015 年 3 月、354 - 370 頁。

上野清貴「会計理論の論理的検証」『商学論纂』(中央大学)第 56 巻第 5・6 号、2015 年 3 月、1 - 38 頁。

上野清貴「会計理論の論理的検証方法」『税経通信』第 69 巻第 14 号、2014 年 12 月、25 - 32 頁。

上野清貴「新しい会計システムとしての RO 会計と EVA 会計」『商学論纂』(中央大学)第 56 巻第 1・2 号、2014 年 7 月、1 - 41 頁。

上野清貴「現在価値会計の進展と継承」『経

理研究』(中央大学)第57号、2014年3月、368 - 393頁。

上野清貴「売却時価会計の進展と継承」『商学論纂』(中央大学)第55巻第4号、2014年3月465 - 518頁。

上野清貴「現代会計の進展と終焉」『商学論纂』(中央大学)第55巻第1・2号、2013年10月、1 - 52頁。

〔学会発表〕(計 6件)

上野清貴「現代会計理論研究の方向性」(統一論題報告)会計理論学会第29回全国大会(関西大学)、2014年10月11日、査読無。

上野清貴「学説研究による会計理論構築の探究」(第2年度最終報告)日本会計研究学会第73回全国大会(横浜国立大学)スタディ・グループ、2014年9月5日、査読無。

上野清貴「学会賞受賞講演」(受賞対象:『簿記のススメ』)日本簿記学会第30回全国大会(神戸大学)、2014年8月30日、査読無。

上野清貴「IFRSをめぐる実務家と研究者の協力関係への期待」(パネルディスカッション・司会)国際会計研究学会第31回全国大会(神戸学院大学)、2014年8月24日、査読無。

上野清貴「グローバル社会の会計研究」(統一論題報告)国際会計研究学会第30回全国大会(中央大学)、2013年9月15日、査読無。

上野清貴「学説研究による会計理論構築の探究」(第1年度中間報告)日本会計研究学会第72回全国大会(中部大学)スタディ・グループ、2013年9月5日、査読無。

〔図書〕(計 6件)

上野清貴(編著)『スタートアップ会计学』同文館出版、2015年9月、242頁。

上野清貴(監修)『人生を豊かにする簿記

続・簿記のススメ』創成社、2015年3月、191頁。

上野清貴(編著)『会計学説の系譜と理論構築』同文館出版、2015年2月、426頁。

上野清貴『会計測定思想史と論理』中央経済社、2014年8月、353頁。

ほか2件

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上野清貴(Ueno, Kiyotaka)
中央大学・商学部・教授
研究者番号: 90140631